

之作品集

13

文藝春秋

五木寛之作品集 13

裸の町

1974年8月20日第1刷

著者／五木寛之

発行者／樫原雅春

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話（代表）03-265・1211

印刷所／凸版印刷株式会社

製 函／株式会社加藤製函所

製 本／大冢製本印刷株式会社

© 1974 Hiroyuki Itsuki

Printed in Japan

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

五木寛之作品集第十三巻／目次

裸の町

5

夜のシンバル

259

解説 長田 弘

299

裸
の
町

装幀／養老正也

レタリング／原アト・アクチュアル
表紙・扉カット／エドワルド・ムンク「叫び」より

裸 の 町

〽一九六七年九月〜一九六八年四月雜誌連載〻

第一章 胎児の耳をもつ男

仕事のはじまり

九月のはじめ、朝の七時ごろだった。街の空気は、まだ湿り気をおびて、気持が良かった。日生劇場のベージュの壁面が、淡い朝の陽さしの中でくっきりと見えた。

車は劇場の手前を右折し、さらに右へ曲ると、帝国ホテルの新館の前でぴたりと止った。

「一六二三号室でございます」

背中を向けたまま、運転手が言った。彼は私にあまり

顔を見られたくないらしかった。

「料金はいいのかね」

と私は軽い皮肉を言ってみた。自家用車の運転手は、ふつう客より先に車を降り、素早くドアを開けようとするものだ。そんなやり方が好きなわけではないが、背中を向けたまま、振り向こうともしないのは、いい感じのものではない。たとえ迎える車でもだ。

「料金は結構でございます」

と運転手は感情のない声で答えた。こちらの皮肉など相手にしているひまはないといった口調だった。日ごろ特別な階級の連中を乗せつけているため、自分もその仲間の一員のように錯覚してしまった使用人の声だ。

私が降りると、黒塗りのリンカーンは音も立てずに滑り出した。厄介な荷物をようやくおろしたといった感じの出足だった。

ドアを押してロビーにはいると、フロントの男がちらと、目をあげて私を見た。私はウインドウ・ベインのオリブ色のツイードの上衣に、ベージュのボロシャツ、薄手のフラノのスボンという楽な恰好をしていた。朝、

帝国ホテルに初対面の外国人を訪問する服装ではないかも知れない。だが、これは私の職業上の制服だ。フリーのルボライターとしては、上等なほうだろう。

私はフロントの所にまっすぐ歩いて行き、一六二三号室はどこか、とたずねた。

「あちらの一番はしのエレベーターをお使いください。六階の右側になっております」

「ありがとうございます」

私は歩き出しかけ、何気なく振り返ってきいた。

「ミスター・ベレスはブラジルの人かい？」

「ミスター・ベレス？ さあ。お泊まりのお客様でしようか」

「いやいいんだ」

私はうなずいてロビーを横切り、ガラスのドアを開けて、そのエレベーターの所へ行った。

六階で降り、淡いグリーン（じょうろん）の絨緞（じゅうとん）をふんで行くと、右側にその部屋があった。

一六二三号。きのうアパートにかかって来た電話で指定された部屋だ。その見知らぬ男は、達者な日本語で、

六時半に迎える車をよこすと言ったのだった。

ドアをノックしたが、返事がなかった。しばらく時間をおいて、もう一度ノックする。部屋の中からは、何の物音もきこえてこなかった。三度目に少し強く叩いてみた。返事はなかった。

少し考えて帰ろうとしたが、念のためもう一度ノックしてみた。

男の声がきこえた。少し待て、とその声は英語で言った。私は待った。

ドアが細目にあき、高い位置に男の灰色の目が現れた。

「ミスター・ベレス？」

「イエス」

津上卓也だ、と私は日本語で言った。

「きのう電話をくれたのは、あなたでしょうか？」

ベレス氏がドアを開け、両手をひろげて首をすくめて見せた。日本語は駄目なのだ、と彼は英語で答えた。私は英語で自己紹介をし、きのう電話でここへ呼ばれた男だ、と言った。

「電話は私の友人にかけてもらったんだ」

とベレス氏は言い、私を招じ入れると、ドアをしめ鍵をかけた。

割合にゆったりしたシングルの部屋だった。いささか古風だが、機能一点張りのビジネス・ホテルより落ちつくかも知れない。アパートの代りに、こんな部屋を長期に借り切つて使うのも悪くないな、と私は思った。窓にはブラインドが降りていて、外は見えなかった。ベレス氏は、椅子を私にすすめ、自分は窓際に立つて、何かを確めるようにこちらをじつと眺めた。

大きな男だ、と私は思った。光沢のあるガウンを着て、裸足で立っている。百九十センチはあるだろう。ただ背丈の割りには肥つてなく、意外に敏捷そうな感じもある。やや怒り肩で、首は太く、がっしりした意志的な顎と広い額を持っていた。目は淡い灰色。褐色の髪と、陽灼けたサモン・ピンクの肌が健康そうな印象をあたえる。長く外国航路の豪華船に乗っていて、最近なにか理由があつて陸上勤務に回つた高級船員といった感じだった。私はこういうタイプの男が、嫌いではない。

ベレス氏は長い間そうして黙っていた。しばらくたつ

て、突然にやりと笑うと、私に向つて手を差し出した。

「トニー・ベレスだ」

「わかつています」

「おれは礼儀知らずだが、気にしないでくれ」

ベレス氏は私の前に体を折るようにして腰かけた。彼はごつごつした英語を喋つた。

「東京に二十年住んでいる私の友人がいる。きのう電話をかけたのは彼だ。それから、あんたをおれたちに推薦してくれたのな」

「ぼくはその友達とやらを知りませんがね」

「だろうな。彼は表に出る男じゃないから」

ベレス氏は、引出しをさぐつて煙草の袋を掴み出した。アメリカ煙草でも、イギリスの品でもない。かなりくしゃくしゃになっているが、袋の上に馬に乗った白衣の酋長のような絵柄が見えた。彼はその煙草の袋を私の目の前に出し、最後の一本をつまみ出すと口にくわえ、袋をひねり潰して灰皿に押しこんだ。

「さて、何から話そう」

ベレス氏は大型のライターをカチリと鳴らすと、まっ

すぐ私を見て低い声で言った。

「まず、ぼくを呼んだ理由からうかがいましょう」

と、私は言った。面白そうな相手だったが、それとビジネスとは別だ。私はフリーのルポライターで、雑誌社や、外国の通信社に記事を書いて生きている。大新聞や、週刊誌の網の目からこぼれた変った材料を、じつくり半年も一年もかけてこつこつ追いかけて、まとまったレポートに作りあげる仕事だ。

出来た記事が売れるとは決っていない。時には何年も断続的に調べつづけて、やっとまとめあげた記事が、全く相手にされないこともある。だから私は絶えず一本か二本の依頼取材の注文を抱えて働いていた。興味本位の時には私立探偵めいた調査の仕事もあるが、それも仕事のうちだった。

良いルポルタージュを書く、ということと良い生活をする、ということはイコールではない。むしろ、対立する場合が多かった。

だから私は、きのうの突然の電話に応じてこのホテルへやって来たのだ。こんな早朝からだ。

「あんたと仕事の話をしたい」

と、ベレス氏が言った。「私の方では有能な日本人の協力者が必要なのだ。ただ、仕事ができるというだけの男ならほかにもいる。東京へ着いて一週間のうちに、私はあんたで七人の日本人と会った」

「試験でもあるんですか？」

私はさっきの運転手の背中を思い出して、少し皮肉な調子で言った。「ぼくは一方的にやとわれるわけじゃない。依頼者の側の条件と動機に同意できたとき、はじめて仕事を引きうけるんです。テストをやろうというんなら帰りますよ。小学校の時から、試験とルゴールが嫌いなんでね」

ベレス氏は興味ありげな顔付きで私の口もとをじつとみつめていた。全く私のいやみを気にしていない表情で、最後までこちらの言うことを聞き終えると、
「テストはしない。ただ、一つだけ聞いておくことがあるんだが——」

「どうぞ」

ベレス氏はしばらく黙っていた。それから、重々しい

莊重なくらいのもったいぶった口調でたずねた。

「あなたはナチス・ドイツのかつてのファシストたちの復活を望むか、それとも連中の再登場に反対か？ あんたの率直な意見を聞きたい」

「……」

私はあつげにとられて、目の前の大男を眺めた。ヒッラーが死んで二十年以上もたった今ごろ、ナチのファシストがどうしたというのだろう。大学にいた頃、映画サークルにいて、レジスタンス映画をあさっていた時代なら多少の関心も湧いたかも知れない。だが、現在の私にとっては、ナチの親衛隊も、ヒムラーも、しよせん伝説中の人物に過ぎなかった。私にとっては、今年やつと取りつけたルームクラーの分割払いの集金人の方が、よっぽど気になる存在なのだ。

「どうかね？」

ベレス氏は、じっと目を細めて私を見た。

「もちろん賛成じゃありませんよ」

と、私は言った。「でも——」

ベレス氏はうなずいて、新しい質問をあげかけた。

「それでは、私たちの仕事を引受けたとして、仮りに相手方がそれ以上の報酬を呈示してきたとしても、裏切ったりはしないと誓えるかね」

「ぼくは契約を守るだけです」

私は突っぱねるように答えた。私には早朝からホテルに人を呼び出して、ナチス・ドイツがどうしたのこうしたのなどと現実性のない話をはじめの男の神経がわからないのだった。いいかげんにあしらって、手を引いた方が利口だ、という気がしてきた。どうも馬鹿げた話のようだ。

「話はそれだけですか？」

と、私はきいた。

ベレス氏は立ち上って大きなボストンバッグの中から、一冊の週刊誌を取り出した。それは、出版社系の週刊誌で、表紙はミニスカートの女優が下からアップで狙っている。五月十八日の日付けが見えた。

ベレス氏は、その週刊誌を私の前に置いた。

「この雑誌を知っているかね」

「ええ。時には多くの記事が載ることもありますよ」

「それは知っている」

「それがどうかしたんですか？」

「最後のページのグラビアだ」

私はその週刊誌を手にとり、ページをめくった。

そのグラビアは「私の深夜」というタイトルで、有名な作家の顔が中心にうつっている。その作家は、ホテルの酒場のカウンターでブランデーのグラスを抱えこむようにして坐っていた。

「この人なら知ってますよ」

と、私は言った。

「その男のうしろに坐っている顔だ」

ベレス氏が呟いた。「その顔を探してもらいたい」

「なるほど」

それは銀髪をきちんとなでつけた初老の外国紳士で、少しうつむくような姿勢のまま、ウイスキーのグラスを口に当てていた。ピントがずれているので、はっきりした特徴はつかめない。だが、その横顔には、どこか暗い異様な雰囲気かじんでいた。すでに全盛期を過ぎた有名な音楽家が、外国へ巡業に来て深夜独りで酒を飲んで

いるような感じだった。品のいい、知的な口もとをしていた。

「これは誰です」

と私は聞いた。

「誰だと思う？」

「さあ」

私は苦笑して、ふざけた調子で答えた。「第二次大戦中にユダヤ人狩りで活躍したナチの將軍のなれの果て、というのはどうです。そして、あなたは彼らを捕えて裁判を受けさせるために、世界中を駆けめぐっているユダヤの秘密機関員といったところかな」

「冗談を言いたければ、仕事の話がすんでからにしてくれ」

ベレス氏が気むずかしい顔で言った。

「私たちはあんたを金でやとうつもりだ。しかし、われわれがやっている仕事は、金のためじゃない。そいつは——」

「人類のため、ですか、それとも世界の平和のためですか」

私のへらず口をベレス氏は黙って受けとめると、静かなさげな調子で言った。

「考えようによつては、その両方のためかも知れん」

私はしばらく黙っていた。ベレス氏は、じっと私をみつめて何も言わなかった。だが、彼の目の中には、何かとても残酷な厳しいものが光っているように見えた。このまま帰れそうにもない、という気がした。どうやら冗談ではなさそうだ。

「仕事の内容も、目的もいちおうわかりました。ぼくの方は報酬さえ折り合いがつけば、引受けてもいいですよ」

ベレス氏がうなずいた。

「私のほうも依頼していいと思っている。ここに、あなたに関する資料があるが、これまで会った男たちの中では、あんたしかいないと思うんでね」

引出しからベレス氏は分厚い調査資料のファイルを出してテーブルの上においた。

私は何となくいやな気がした。私に関して、何をそんなに沢山調べる事があるのだろうか。私のルームクラ

ーの分割払いの残金まで、きっとベレス氏には判っているに違いない。そのファイルの厚さは、私の体の奥に、何かじわじわとにじり寄ってくる底深い不安のようなものを感じさせた。

「この男を発見してくれば、一万五千ドルお払いしよう。ただし、本人を私たちが確認した後でだ」

「え？」

私は相手の言った金額が信じられずに絶句した。

「一万五千ドル」

と、ベレス氏はくり返した。私は無理に平静な顔を作つて、かすれた声を出した。

「経費は別でしょうね」

「その積りだ」

「ぼくはルポルタージュを書くのが仕事で、たずね人探しは余り得意じゃないですよ」

ベレス氏はうなずいて、資料の束を指で叩いて見せた。「それはわかっている。あんたの取材ぶりの粘り強さと正確さを、われわれは買ったのだ。それに、あんたの体力もな」

「やってみましょう」

私は少し考えた後で言った。

「報酬も魅力だが、何か面白そうな材料にぶつかりそうな予感があるんでね。もし、この男を発見することができなかった場合、その経過を自分なりに記録にまとめて雑誌社に売っていいですか？」

「それはあなたの勝手だ」

とベレス氏は言った。「だが、仕事の進行中は絶対に秘密を守ってくれ。あんた自身のためにもな」

それからベレス氏は何かに祈るような視線を壁に向けて、小声で呟いた。

「もう時間がない。この男を一日でも早く見つけることが何十万、いや、何百万人の人間の命をすくうことになるだろう。もし、彼をわれわれが発見できなければ——」

「どうなるんです？」

「……………」

ベレス氏は黙って首を振っただけだった。

私は立ち上って、その週刊誌の発行日を頭にきざみこむと、ベレスに言った。

「今日は仕事が残っているんで、これで失礼します。また後で電話でも連絡しましょう。あなたはいつまでこのホテルに滞在なさるんですか？」

「まだ当分はいるよ」

と、ベレス氏は立ち上ってドアを開けた。

「トルコはどうでした？」

私は別れぎわに何気ない調子できいた。

「トルコだって？」

ベレス氏の声がからかうような響きをおびた。

「なぜだい」

「あなたのさっき捨てた煙草のデザインに見覚えがあったんですがね。去年の夏、アンカラの飛行場の売店に売ってたのを思い出したんですよ。あそこで買ったんじゃないんですか？」

「あなたに関係のないことだ」

ベレス氏はドアを閉めながら言った。

ホテルを出ると、強い陽ざしが舗道に落ちていた。ふと、夢からさめたような気がした。妙な話にひっかかったもんだ、と私は考えながら日比谷の方へ歩いて行った。